

いて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたもう」(『唯信鈔文意』と述べている。一如とは、真如ともいい、唯一絶対で、ありのままの、形相を超えた、いわば「真理そのもの」であるが、衆生のためにわざわざ姿をあらわし、その真理の世界に衆生を導こうと働いてくださっていると親鸞は考えている。

この真理の姿は衆生には見えないので、真理は自らを知らせるための方便として法蔵菩薩という人間の姿をとり、人間の言葉を使い、救い取ろうとしているというのである。親鸞の念仏はこのような働きの中に把握されねばならないものでもあるが、ではこの一如でもある阿弥陀仏は、宗教学的にはどのように考えればよいのであろうか。いわゆる一神教的な人格神ともいえないし、かといって哲学的な真理でもない。

彼は真理そのものという側面から見た仏を「法身」と呼び、「法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、ころもおよばれず。ことばもたえたり」(同)というと同時に、阿弥陀仏を「尽十方無碍光仏」「不可思議光仏」とか「無量寿仏」などと呼ぶ。「光」や「いのち」のイメージをもつてとらえようとしている。ここには「法身」や「方便法身」という語を通して一如・真如・真理・涅槃の世界が人に関わろうとしているという、端的な真理ではない、いわば「いのちある真理」としてそれらがとらえられていると思われる。

したがって本来人格性をもたない一如が、その非人格性を捨ててまでも衆生に応答させようとする非人格的であると同時に人格的にもなる存在の「やむにやまれぬ」働きの中に、親鸞は念仏の根源を感じ取っているのであるから、そのような独自の

存在との関わりの中に、さらに念仏の内的構造が問われていかなければならないと思えるのである。

親鸞「自然法爾」における「はからひ」の意味

藤 能 成

親鸞(一一七三—一二六三)が晩年に著した「自然法爾の事」は、彼が生涯で到達したもつとも高い精神的境地を示す文章である。「自然」とは「おのづからしからしむ」の意であり、行者が「阿弥陀仏の御ちかひ(誓願・仏智)」について、はからわず、「南無阿弥陀仏とたのむ」時に、無上仏の働きにより、無上仏になりゆく階梯へと導かれることを意味している。その中で行者が離れるべき行為として「はからひ」について繰り返し言及するが、その意味は「繰り返し推し量る」知的・精神的な行為・活動であった。

初期仏教において、定と念仏は一体的に修された。対象に向かって念を集中する中で、定に入った。仏はもつとも念ずべき対象であった。修行者は、慧を修するために定に入り、「言葉による知的・概念的な理解・認識」を抑制することにより、感性を以って世界の実相に触れて行つた。この「言葉による知的・概念的な理解・認識」こそ、親鸞が言うところの「はからひ」である。

念仏は「はからひ」すなわち(知性・理性により)「物事を、言葉を通して知的・概念的に理解・認識しよう」とする精神の

働きを抑制して、〈感性により〉自然・宇宙の働きをありのままに感じ直観（如実知見）していくことにより、仏智の働きの運ばれていく行であり、初期仏教における定・慧の修行のバリエーションとして位置付けられる。親鸞はこれらの行為がすべて、阿弥陀仏の誓願の働き（仏智）によってなされるとした。

現代人の多くは、「言葉による知的・概念的な理解・認識」こそが「正しい理解・認識である」と信じ、「観念の世界」に埋没してしまい、ありのままの世界に出会うことができずにいる。しかし言葉とは「経験した物事」に対して付与される記号であるため、「経験していない物事」を表す言葉は、当人にとって理解・認識ができない。言葉は共通の経験を持つ人々の間でのみ通用する記号である。また、言葉は「経験した事柄」に対して付与される記号であるため、言葉それ自体は実態・実体を表すものではない。私達がある言葉を手掛かりに、物事を考え認識しようとする時、その言葉と私達自身の経験（あるいはその事柄についての印象）との繋がりを探し、それらを組み立てていくことになる。だから私達は「言葉による知的・概念的な理解・認識」によつては、物事や実態・実体、ありのままの世界に出会うことができないのである。

自然に生きる道として親鸞が示したのは、「南無阿弥陀仏とたのむ」生き方であり、それは仏智の不思議を信じ、念仏し、「はからひ」を離れて、如来の誓願にまかせるところに、無上仏への道が開かれるというものであった。

現代人の認識方法は、親鸞が言うところの「はからひ」そのものであり、現代人は自らの「はからひ」によって、ありのま

まの世界を認識できる仏智の働きを拒絶してしまい、閉塞した人生を送ることを余儀なくされている。現代人は「はからひ」の故に、仏智から遠ざけられ、孤独・不安・不信・虚無感等の苦悩に苛まれているのではないだろうか。親鸞の「自然法爾」は、現代人の認識方法・生き方について大きな疑問を投げかけていると言えよう。

靈山勝海『末灯鈔講讃』二〇〇二年、永田文昌堂。嬰木義彦「親鸞書簡にあらわれた法然上人（その二）——「義なきを義とす」の教説をめぐって——」（『真宗学』四五・四六合併号、一九七二年）参照。

親鸞の六字釈について

貫 名 讓

『教行信証』『行巻』と『尊号真像銘文』（以下『銘文』）に見られる六字釈について、『行巻』の読解に『銘文』の文言をそのまま当てはめ、たとえば「帰命」というのは私が帰命する私のはたらきである……そのはたらきは、とりもなおさず私を召喚したまう如来のはたらきの私の上に具体化したもの……南無阿弥陀仏とはそのようなはたらきである」（星野元豊『講解教行信証』二五五頁）に見られるように、『行巻』の文言も衆生の心相において捉えようとする。それぞれ六字の解釈が施されているが、『行巻』における「南無」（帰命）は法の道理として、『銘文』における「南無」（帰命）は衆生の心相として展開され